





ウィーン近郊にあるベーゼンドルファーの工場

## ベーゼン ドルファー社の 誇り

ハイテク産業が幅をきかせている今日この頃、身の回りの機器の精密さには驚くべきものがある。コンピュータで制御されたオートメーションで作られる数々の製品は日進月歩の勢いで発達し、それらの変化を常にフォローしていくのは並大抵ではない。

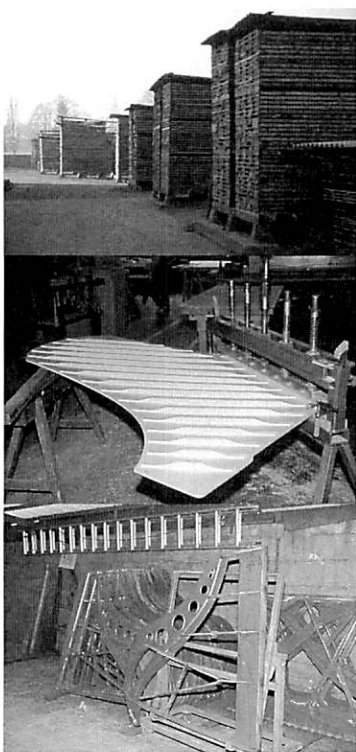
その半面、ひとつひとつに職人の愛情が込められ、丹精に手作りされたものの価値も見直されるようになった。どこでも買える、誰でも持っているのでは飽き足らず、自分の目で確かめ、気に入ったものを持ちたくなるのは人間の欲望のひとつだろう。

そんなわがままな人にびったりのピアノがオーストリアで作られている。御存知「ベーゼンドルファー」だ。

この会社で作られるピアノの数は年間千台を越えない。グランドピアノだけを数えれば年間750台、一日平均約2台である。

一台のピアノが完成するまでには、何と62週間もの時間がかけられる。ゆうに一年以上だ。工場はそれほど大きくなく、働いている工員さんは全部で160人程度。女性も多い。しかしひとりひとりが自分の仕事にプライドを持ってピアノを作っている。

ベーゼンドルファーの歴史は古



屋外で材料の木のシーズニングが行われている

グランドピアノの響板

ピアノの鉄骨

ピアノの外装を塗装する

機械も使って塗装に磨きをかける

巻線(バス弦も)本ずつ手で製作する





弦を1本ずつ張って!

く、最初の楽器が作られたのは、今をさかのぼること160年以上前、ペーターヴェンやシューベルトが亡くなった直後の事だった。

フランツ・リストはこのピアノを好んで演奏したし、その開発においても良きアドヴァイザーとなった。ハイドン・モーツァルト時代に広く演奏されていた華密きやくしやなピアノから、より耐久性があり、大きな華やかな音が出せるようになったベーゼンドルファーの新型ピアノは、歴史にその名を残すたくさんのピアニストに愛され、今日に至っている。

ピアノ組み立ての大部分は、ヴィーナー・ノイシュタットというウィーン近郊の町で行われている。ベルトコンベヤーを使用した流れ作業のようなものは一切ない。一工程終わると、その楽器を隣のセクションまで人力で押して運ぶのだ。工場は2階建てだから、中間ではエレベーターを使って移動しなくてはならない。

工員さん達の目は真剣そのものである。そうだろう、ここで働いている人達の多くは国家試験に合格したエリートばかりなのだ。

工程の多くは人間の手作業によってこなされていく。生身の人間が扱う事によって、材料の木材がもっている特有のくせやバラツ



アクションを調整する



ハンマーに一本ずつ穴をあける



アクションを組み立てる



鍵盤を組み立てる

きをチェックし、それに合った加工を行うことができる。こういったところに熟練工の勘と経験が生きてくるのである。

200本以上あるピアノの弦も、それらを一本一本丹念に手作業で張っていく。

このメーカーで作られたピアノのうち、ほぼ9割は外国に輸出され、日本はそのうちでも最も重要なマーケットのひとつである。

最近では日本国内各所のコンサートホールは言うに及ばず、スタジオや個人の家でもベーゼンドルファーにしばしばお目にかかれるようになってきた。ピアノもメーカーそれぞれに特有の味わいがあるが、ベーゼンドルファーからは、ウイーンの香りがたちのぼってきそうである。

ところで、ピアノメーカーの種類にはずいぶんいろいろある。見た目には同じように黒い楽器も、それぞれの弾き心地にはかなりの差がある。

それぞれにキャラクターのある楽器でもあり、よく「どのメーカーの楽器が一番好きですか」との質問を受けるが、こればかりは一概には答えられない難問だ。

個々のピアノのフリーリングの違いを説明するのにはわかりやすい例は、自動車だろう。値段の幅も

ウィーン市にあるベーゼンドルファー本社



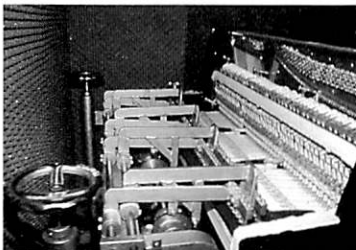
ベーゼンドルファー本社の試弾室



本社にあるコンサートホール



出来上がったピアノは機械によってまんべんなく慣らし演奏される



最終的な仕上げの調整



社長のドクター・レドラー氏と



似たようなものである。

ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、アメリカ、そして日本で生産された最高級モデルの車を並べて、「さあどれが一番良いですか」と聞かれても即答できないだろう。

どの車にもハンドルがあつてアクセルを踏めば走るしブレーキを踏めば止まる。しかしその味わいと乗り心地の好き嫌いは個人の趣味に属する問題で、優秀とはまた別の次元の話だ。柔らかめのクッションを愛する人もいれば、多少堅めの方が疲れなくて良い、という人もいる。しかも大きい車でも軽自動車でも100キロの道程を時速100キロで走れば1時間。

しかしそれがたとえ新車でも、1千万円の車と80万円の車とではどこかが違う。ピアノも同じだ。弾き心地が微妙に違う。どんなに優れた性能を約束されていようと、調整が悪ければ元も子もないのもピアノ、車、双方の共通点である。

演奏者の腕でずいぶん響きが違ってくるピアノだが、「バカとはさみは使しよう」という呪文だけでは何ともならない。